

ハートル夫人の手紙

— トロロープの『今の生き方』の翻訳を題材として —

木下 善貞

アンソニー・トロロープの『今の生き方』を翻訳していくなかで、ジェンダーという観点から気づいた作中人物ポール・モンタギューとウィニフレッド・ハートル夫人の関係を特に取りあげて論じてみたい。二人の関係をとりあげるといふことは、当事者としてのこの二人の作中人物と、二人を扱うトロロープの全知の語り手と、さらにその外郭にいる翻訳者の私を扱うということだ。四者それぞれが目と口、視点と声を具えており、四者それぞれが別個のジェンダーやセクシュアリティを具えている。ジェンダーやセクシュアリティに焦点を当てながら、ポールとハートル夫人がどう性格づけられ、状況をどう処理するか、語り手がそういうポールとハートル夫人をどう扱うか、これらを把握した翻訳者は具体的にどう表現に当たったらいいか、こういうことを順番に議論してみたい。

若いイギリス人ポール・モンタギューは、サンフランシスコからの帰英の旅で道連れになった美しい米国女性ウィニフレッド・ハートル夫人に魅惑され、ほどなくして婚約する。しかし、ポールは再びサンフランシスコを訪れたとき、ハートル夫人に関するいろいろな噂を聞いて、婚約の破棄を決意し、別れの手紙を夫人に送る。

その噂というのは、①ハートル夫人はオレゴンで男を銃撃して殺した。②ハートル夫人は夫のカラドック・ハートルと決闘した。③ハートル夫人は夫が死んだと言っていたが、ほんとうは生きている、というものだ。別れの手紙を受け取ったハートル夫人は、資産を取り戻す裁判のため米国で手間取るけれど、裁判が決着するとすぐポールを追って渡英し、婚約は生きていると主張する。ときは1872年のことだ。ポールは噂に関する弁明を夫人から聞いて

たあと、結局再度別れの手紙を夫人に書くことになる。この間に夫人がポールに送る二通の手紙をどう翻訳したらいいか、それがこの発表の中心課題だ。

もっとも外郭にいる翻訳者から見ると、まず発話と行為から形作られる作中人物の性格づけがどうなっているか判断する必要がある。ハートル夫人は命を守るために男を拳銃で殺し、酔った夫を寝室に入れよう拳銃を用い、離婚の訴訟を起こし、資産を守るため裁判で争う。夫人は闘争的で、男性的資質を強く具えている。それはハートル夫人を描くとき特に強調される山猫の爪、鞭、ナイフ、拳銃に象徴的に表現されている。山猫の爪、鞭、ナイフ、拳銃は攻撃的な男性の記号 phallic symbol であり、それは「女らしさ」というジェンダー制約や枠を超えて、女性でありながら男性性を持つ、つまり両性具有 (androgyny) を表すものとなっている。ハートル夫人は「女らしさ」のジェンダー枠を超える女性として性格づけられている。

ポールはハートル夫人と出会ったとき、一方的にのぼせあがり、「当初夫人の魅力に愚かにも幾度も屈服し」、夫人の過去を問いたずすこともなく婚約に突き進む。彼は夫人との別れを決意して最初の別れの手紙を書いたあとも、渡英して来た夫人を観劇に連れて行ったり、保養地ローストフトのホテルに同行したりして、ぐずぐずと別れを遅延させる。夫人はポールに「女性が鞭を振るうというような意見を持つのは、紳士にはきつと——おもしろくて——心地よいものなんです」とほめかす。ポールが夫人に惹かれるのは、鞭を持つ女性、男性の記号を持つ女性に惹かれるからであり、それが彼のマゾ的セクシュアリティに訴えるからだ。ポールはマゾ的セクシュアリティを具えた人物として性格づけられている。

では、語り手はそんなポールをどう見ているか？ 語り手は「紳士」というジェンダーの観点からポールを批判する。ポールは別れると決めたハートル夫人と別れられず、躊躇し、ぐずぐずと優柔不断に振る舞う点で「卑怯」であり、紳士の規範に反する。ポールは夫人への思いやりだと言い訳しているが、夫人に無意識に惹かれているので（つまりセクシュアリティのせいで）、やると決めた義務を行使することができない。語り手はポールがセクシュアリティをねじ伏せて、紳士としてジェンダー役割をはたす必要があると見ている。

語り手はハートル夫人をどう見ているか？ 語り手は、ポールがハートル夫人と別れたあと、「家庭の天使」であるヘンリエッタ（ヘッタ）・カーベリーと結婚するというプロットを描かなければならない。もともと語り手は女性的なヘッタとハートル夫人を対照的に描くため、夫人については凶暴性や男性の記号を device として利用した。しかし、ハートル夫人が山猫的性格を見せて、ポールとヘッタの関係を妨害するような状況が生じてはプロット上好ましくない。語り手はポールとヘッタの仲が深まるころからプロットを優先させて、テキストの初期に確立したハートル夫人本来の山猫的性格を邪魔なものとして見ていく。それで、夫人の山猫的性格が行動面に現れないよう、発話面だけに限定的に現れるように操作する。また、夫人がポールとの別れを案外すんなりと受け入れるように操作する。

では、翻訳者はこのような分析に基づいてハートル夫人の二通の手紙をどのように翻訳したらいいだろうか？

[引用文献]

Anthony Trollope (2016) *The Way We Live Now*, ed. Francis O’Gorman, Oxford UP.

(きのした よしさだ・北九州市立大学名誉教授)